





アが、天に向かう光の直線の崇高をプロバガンダとして使ったパブリックライティングインスタレーションを、そのまま援用したものだ。しかし、ヘメル作品は、光のつくり出す空間デザインを、6秒おきに世界各国のアニマスをネットワークユーザーに解放する点が批評的であ

り、「リレーショナルアーキテクチャ」と名づけられている。

音響を含めた新たな知覚体験の出現

山口情報芸術センター「YCAM」では、LEDライトの技術革新を、固定照明だけではなく、インタラククションのために開発し、アート作品に適用を図っている。

渋谷慶一郎と池上高志の「finnac line」(2006)^[P.78]は、池上の複雑系理論におけるジェネレーターが生み出す例外的アルゴリズムパターンをデータ化し、音色とdB（デシベル）の関係だけに置き換えてサウンドデータ（スコアリングできない音だけによるコンストラクション）をつくり出し、これをもとに特殊な3Dプログラムで立体音響にアレンジする画期的な作品である。サウンドの空間変化に対応したサンプリングデータを用い、LEDライトによるインスタレーションとし

て、音の運動を視覚化させている。

絵画を光学的な発光面としてとらえる久保田晃弘のインスタレーション「純粹φ Abstract Painterly Interface」(2008)では、視覚における意味的な色（何を見たか）ではなく、生理的な色（どの波長に反応したか）が特権化される。身体を覆うほどの大型サイズの画面に映像が投射され、鑑賞者の周囲の空間を照らすLEDライトの色を、四方からのカメラ撮影によってサンプリングし、その画面にドロップさせる。

